

# 令和2年度校内研究について

令和2年4月24日（金）

## 1 研究主題

### 「学びの自立を目指して」 ～深い学びにつながる授業の在り方～

## 2 主題設定の理由

### （1）これまでの研究の経過

平成28年度・29年度は「魅力ある授業づくり」と「望ましい集団づくり」の2つを柱として、研究主題「自ら学ぶ生徒の育成」の具現化を目指した。

令和3年度（平成33年度）からは、全ての教科等で新学習指導要領が実施される。今回の指導要領改訂は、予測困難とされるこれからの時代を生徒たちが生きるための資質・能力を確実に育成することである。そのために「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善を図ることが求められている。そこで本校では、平成30年度から、研究主題を「学びの自立を目指して」とし、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、3年間で研究を進めようと計画してきた。

1年次（平成30年度）…「主体的な学び」

～生徒が主体的に学ぶには・『見通しと振り返り』～

2年次（平成31年度）…「対話的な学び」

～生徒が互いの考えを受け止め、『対話』を通して集団や個人の学びを深めるには～

3年次（平成32年度）…「深い学び」

～生きて働く知識にするには・『見方・考え方』～

今年度は3年次研究の3年目にあたる。

### （2）今年度の研究の基本的な考え方

今年度の研究主題を『「学びの自立を目指して」～深い学びにつながる授業の在り方～』とし、今年度は「深い学び」に焦点をあて、自ら学びに向かっていく生徒の育成を目指して研究を進めたい。「学びの自立」とは何か。生徒は学習過程で、自ら課題を見出し、思考・判断・表現をしながら課題を解決していく。それを通して、生徒は自らの成長に手ごたえを得て学び意欲が湧いたり、新たな課題を見つけて追及していこうとしたりすることを「学びの自立」と捉え、研究を進めたい。

「学びの自立」に向かう生徒の姿は、以下のように確認されている。

- ・課題を見つけ、自分で考えて解決していこうとする。  
(学習した内容同士を関連させて考える、どうしたら解決できるか考える等)
- ・自分の考えをもち、他の生徒と考えを交流させることにより、他の考えの良いところを吸収し、自分の考えを広げ・深めてよりよいものにしようとする。
- ・学習を振り返ることで、わかったことを認識して自己の成長を実感するとともに、次の学習への意欲を高めている。
- ・新しい課題を見つけ、興味・関心を持ち追究していこうとする。
- ・自己実現に向かって、計画的に継続して家庭学習をする。

「深い学び」とは教育課程部会中学校部会議事録の中で、「習得・活用・探求の学びの過程の中で、教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせて思考・判断・表現し、学習内容の深い理解や資質・能力の育成、学習への動機付け等につなげることの学びである」と書かれている。

「主体的・対話的で深い学び」をめぐるっては、2014年の文部科学大臣諮問「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」の段階では「主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆるアクティブ・ラーニング）」と記されていた。それが2015年の「教育課程企画特別部会 論点整理」で「深い学びの過程」「対話的な学びの過程」「主体的な学びの過程」となり、最終的には「主体的・対話的で深い学び」と表現されるようになっていく。ここでは、子供が前のめりになって、本気で、真剣な学びを実現することの大切さとして「主体的な学び」が記されている。また、様々な考えをもつ多くの人々との対話を行うこと自体の価値として「対話的な学び」が記されている。この2つの学びは極めて重要であり、授業において実現すべき学びと考えるべきであろう。しかし、いくら前向きであったとしても、対話は活発に行われたとしても、その学びが期待する各教科等の目標や内容に向かっていなければ、その学びには疑問符がつくことになる。その学びが這いまわり、高まりを見せるものでなければ、期待する学びとは言えないのである。ここに「深い学び」が生まれてきた価値がある。この「深い学び」を示すことによって、各教科等の固有性や本質を視野に入れた質の高い学びを目指すことが明確になった。さらには、この「深い学び」をはっきりさせるために「見方・考え方」というものが示されることとなる。「答申」には、次のように表現されている。

「アクティブ・ラーニング」の視点については、深まりを欠くと表面的な活動に陥ってしまうといった失敗事例も報告されており、「深い学び」の視点は極めて重要である。学びの「深まり」の鍵となるものとして、全ての教科等で整理されているのが、第5章3において述べた各教科等の特質に応じた「見方・考え方」である。

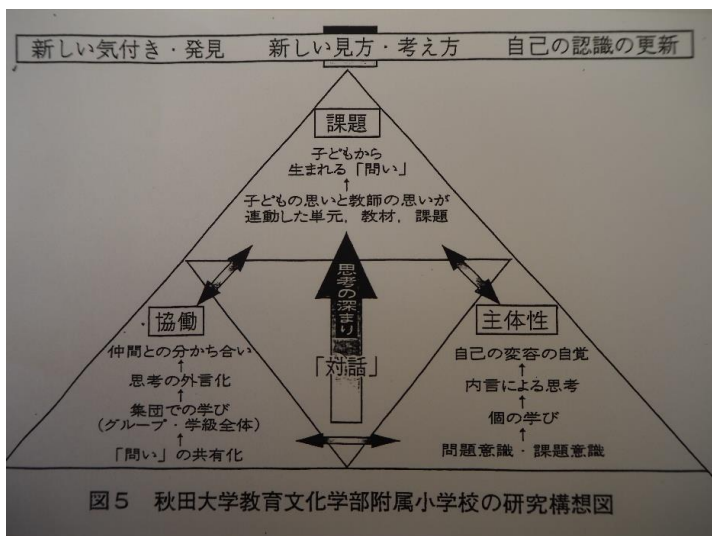
この「見方・考え方」の具体については、「答申」の第5章で次のように記されている。

その過程においては、“どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で志向していくのか”という、物事を捉える視点や考え方も鍛えられていく。こうした視点や考え方には、教科等それぞれの学習の特質が表される場所であり、(中略)こうした各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方が「見方・考え方」であり、各教科等の学習の中で働くだけでなく、大人になって生活していくに当たっても重要な働きをするものとなる。私たちが社会生活の中で、データを見ながら考えたり、アイデアを言葉で表現したりする時には、学校教育を通じて身に付けた「数学的な見方・考え方」や、「言葉による見方・考え方」が働いている。「見方・考え方」には教科等ごとの特質があり、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものとして、教科等の教育と社会をつなぐものである。

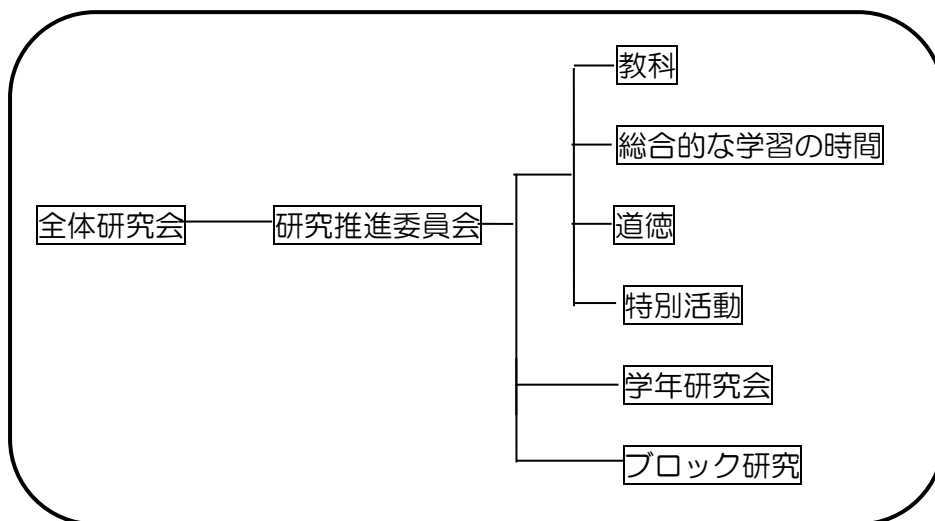
- 各教科で「学びの自立を目指して育む態度」を設定し、学習過程を工夫していく。
- 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け教職員の共通理解を図り、よりよい実践を日頃から実現していく。その際には甲府市教育委員会より示されている「甲府スタイルの授業（こうふのたから）」・「家庭学習の手引き」を活用していく。
- 一人一実践を行う。一人ひとりが計画（ねらい、具体的な取り組み等）を立て、見通しのある取り組みを行う。一実践は二学期中に行い、計画的に実施する。お互い参観し合い、学びの場とする。
- 研究授業を行い、講師を積極的に招聘する。
- 「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を実現するための基盤となる基礎的な知識や技能を習得させたうえで、これまでの2年間で行ってきた「見通しと振り返り」と「対話的な活動」を効果的に取り入れながら、生徒の興味・関心を高め、課題解決の喜びがある魅力的な授業を創造していきたい。それらの知識や技能を活用した「深い学び」の実現を目指す。
- ハイパーQ-Uを年間2回実施する。
  - ※各教科や道徳で深い学びを実践するためには、学級集団の状態が重要であるとの視点に立ち、学級集団の傾向の分析や、個別の生徒の状態を見取っていく客観的なデータであるという共通認識のもと、学年研等で分析をしていく。ハイパーQ-Uがより有効に活用できるように、分析後に考えられた各学年の「具体的な手立て」を全職員で交流する。
- 「考え・議論する」道徳の実践と、OPPAシートを活用した評価の実践を継続する。

## ◆柱2 新学習指導要領の完全実施を見越した評価の検討・作成

- 夏季校内研等で新学習指導要領の評価について学習会を行う。
- 各教科で教育課程（評価規準）を作成する。



### 3 研究組織



### 4 研究日程

第1回	4月24日(金)	全体会	今年度の研究について提案・決定
第2回	5月20日(水)	全体会	教科研(教科で育む態度の検討)
第3回	6月24日(水)	学年研	ハイパーQ-U結果分析・交流 親子道徳の指導案検討 1学期の道徳の振り返りと評価について
第4回	8月25日(火)	全体会	新学習指導要領の評価について学習会 各教科で教育課程(評価規準)を作成 教育課程還流報告 特別活動について(学級目標、1学期の反省)
		ブロック研	一人一実践の計画の交流 研究授業の指導案検討①
第5回	9月24日(木)?	ブロック研	研究授業の指導案検討②
第6回	10月23日(金)	研究授業①	授業研究(細田先生・国語)
		授業研究会	
第7回	11月18日(水)	研究授業②	授業研究(先生・ )
		授業研究会	
第8回	1月27日(水)	学年研	学級経営について(2学期の反省を含む) ハイパーQ-U結果分析・手立ての検討
第9回	2月22日(月)	全体会	本年度の研究の成果・課題
第10回	3月15日(月)	全体会	来年度の研究の方向性

※第6回、第7回の研究授業は目安です。